

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0991300336		
法人名	社会福祉法人 清幸会		
事業所名	認知症高齢者グループホーム第2まつばら荘		
所在地	栃木県那須塩原市黒磯647-5		
自己評価作成日	令和3年10月1日	評価結果市町村受理日	令和4年1月13日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利法人アスク
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189
訪問調査日	令和3年11月18日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

閑静な住宅街に立地し、緑豊かな環境に恵まれている事業所です。地域の皆様の協力も多く、同敷地内にある姉妹施設と連携協働をしながら合同でのイベント開催やボランティアとの交流も行っています。『笑顔とぬくもりを大切に、寄り添いながら「いつまでも自分らしく」生活できるよう支援します』を事業所のスローガンとし、利用者様やご家族様に安心を感じて頂けるような関りと支援に努めています。定期的な訪問看護、訪問診療とも連携を取り合い、利用者様の病状管理や健康管理も行っています。ご利用者様にとっての第二の家として、安心して生活して頂けるような関係作りや環境作りに配慮しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

管理者は、職員に初めから高い介護技術を求めるのではなく、「笑顔とぬくもりを大切に、寄り添いながらいつまでも自分らしく生活できるよう支援します」という分かり易い理念を設定し、基本となる接し方や寄り添い方が職員に十分浸透することを見届けた段階で、より質の高い介護技術を目指す理念に切り替えていく長期的なプランを立てている。職員はこの理念に沿いながら、利用者や家族が安心できるようなきめ細やかで温かい支援を心掛けている。特に、窓越しの面会時にその場で携帯電話で会話ができるように配慮したり、家族に配布する毎月のお便りの中で利用者それぞれの日々の様子がよく分かるように工夫したり、メッセージ入りDVDをプレゼントするなど、コロナ禍でなかなか会えなくても、利用者や家族との間の絆を保つために、事業所が細やかに支援していることがうかがえる。訪問診療医や24時間対応の訪問看護ステーションとの連携が取れているため看取りにも対応しており、日々の介護から安らかな最後まで支援が自然につながっている。現場の意見をリーダーが集約して管理者に伝えることで、事業所運営に反映されやすくなっていて、職員にとっても働き甲斐のある職場となっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	『笑顔とぬくもりを大切に、寄り添いながら「いつまでも自分らしく」生活できるよう支援します』を事業所のスローガンとし、利用者様へ質の高いサービスを提供出来るよう取り組んでいる。	事業所の理念は、利用者に日々対応する上で基本とすべきことを分かりやすく表現したもので、職員が見える壁に掲示して、会議の際にも周知徹底している。職員もその意味をよく理解し、利用者へ寄り添った関わりができるようになってきていると管理者は感じているため、さらに質の高いサービスを目指し、今後精査して理念を次のステップに引き上げることも考えている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	定期的に地域住民の方が事業所へ来荘してくださっており、交流の機会があったが、昨年に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大防止のため交流を自粛している。	運営推進会議のメンバーである地域住民の自治会長や民生委員には、管理者が直接資料を届けに行き、顔を合わせることでつながりを維持するようにしている。定期的に来荘してくれていた近所のボランティアたちからは、コロナ禍が落ち着いたらまた交流したいと言われており、現状は連絡を取り合うだけにとどめている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	新型コロナウイルス感染拡大防止のため交流の機会が設けられていない。関わる機会があった際には困ったことを気軽に相談できる事業所となる為、努力していく。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため2か月に1度書面にて開催している。各事業所の職員の方からご意見をいただき、サービス向上に努めている。	コロナ禍になって一同に集まることができなくなっている中、昨年に引き続き、運営推進会議は書面のやりとりで開催している。添付している資料の中でお便りが工夫されていて事業所の様子がよくわかると、委員から評価されている。現在家族代表の委員が欠員となっており、今後家族代表を選出して、直接意見を聞き取った上で、運営推進会議のメンバー以外のご家族へどのような形で議事録を配布するか検討したいと考えている。	運営推進会議において、現在欠員となっている家族代表の委員を早急に出選して、様々な家族の意見を収集し、今後さらに事業所のサービス向上に生かすことが望まれる。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に出席して頂き、現場の状況や行事・問題点などを報告している。また、いろいろな相談にもものっていただき協力を受けている。	現在書面開催している運営推進会議のメンバーである市の担当課と地域包括支援センターには、管理者が直接資料を届けに行き、その際に情報交換するようにしている。配布資料の中にはアンケートを入れており、意見やアドバイスももらうようにしている。現在コロナ禍で中止になっている介護相談員の派遣について、市の担当課からITを活用できるかアンケートがあった。事業所として環境を整えればぜひ再開したいと考えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	契約時、利用者様、ご家族に当事業所では身体拘束を行わないことをお伝えしている。毎月の職員会議の中でも話し合いの場を設けている。職員は身体拘束をしないという意識も高く、業務の中でも振り返りながら支援に当たっている。	毎月、定例会終了後に別建てで身体拘束適正化委員会を開催している。この中で基本的な知識を確認するとともに、虐待の芽チェックリストをつけて職員自身が行動を振り返り、1か月間それぞれがよく考えて、次の会議の際に具体的な対応策を出し合うようにしている。パルーンの自己抜去が心配な利用者に対しても、身体拘束せず、夜間はよく眠れるように日中の支援を工夫したり、見守りと声かけを中心にして安全な対応を心掛けている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	月に一度の会議の場で虐待防止について話し合いを行い、各職員の意見、感じたことなどを書面化し、施設全体で虐待防止の意識を高めるよう取り組んでいる。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、当事業所では権利擁護制度を利用されている方はいらっしゃらないが、各職員に理解して頂ける様に情報を発信している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に十分に説明を行っている。疑問や質問があった際にはその都度お答えしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	契約の際、ご意見等があった場合の相談受付窓口についてお知らせしている。利用者様、ご家族様との関わりの中で、ご意見があった際にはいつでもご意見をいただける関係作りを心掛けている。	コロナ禍になって面会が制限され、利用者がどんな様子か知りたいという家族の要望に対して、事業所として様々な対応を考えて対応している。電話での連絡の他、希望者には窓越しで面会できるようにし、利用者や家族が携帯電話を持ってその場で会話ができるようにも配慮している。また、毎月のお便りに利用者一人ひとりの様子も掲載するようにして喜ばれている他、敬老会のプレゼントとして、利用者から家族へのメッセージ入りDVDを作成して家族に送ったところ大変好評であった。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は、日常において職員の意見を聞く努力をしている。また、不定期に開催している全体会議、年2回実施している個人面談、毎月実施しているユニット会議等で、スタッフが意見や提案を言える機会がある。	日常の業務中やミーティングの際に出された職員の意見について、管理者はよく精査して総合的に判断し、必要な際は取り入れるようにしている。特に、職員にとってリーダーが相談しやすい存在となっていて、リーダーを通じて管理者も職員の本音を把握できる組織になっている。現場からの意見により、大きめの棚を確保して収納スペースが改善され、業務の効率化が図られた。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年2回の人事評価制度を導入しており、努力や実績の把握、評価をこなっている。面談も併せて行い、職員の意向や気持ちを確認し、向上心を持って働けるように努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は人材育成に力を入れており、年間計画を立てて研修を行っている。事業所に赴き、管理者や職員個々のケアの実際と力量を把握している。法人の介護技術マニュアルに基づき統一したケアが出来るよう取り組んでいる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	市のケアマネージャー連絡協議会へ積極的に参加したり、地域密着型サービス事業者連絡会議等で交流する機会が作れるよう努力している。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にはご本人、ご家族からの要望を確認し、過ごしやすい環境を整えるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族から不安に思っている事や要望などを伺い、解決策を話し合うことで双方が課題を共有し、関係づくりもできている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談があった際、現状を確認したうえで、必要な支援を検討し、状況に応じては、他施設のサービス紹介をする等、柔軟な対応に努めている。		

第2まつばら荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	食事やレクリエーション以外は自室で過ごされている方もいらっしゃいますが、職員と協力し合い、今までの暮らしの中での習慣や役割が継続できるよう心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	新型コロナウイルス感染症予防の為、面会の機会を設ける事が難しい。そのため毎月のお便りに近況報告の欄を追加している。更に、適宜、電話にて連絡を入れ状況を伝えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	新型コロナウイルス感染症により、面会制限をせざるを得ない状況ではありますが、ご家族様を中心にお便りや電話での連絡を実施している。	コロナ禍においては、制限を設けながらも家族との関係性が維持できるように、事業所として最大限の支援をしている。家の畑が気になるという利用者には、事業所裏に畑を作って利用者が得心できるように対応した。11月1日から制限が一部解除されたため、時間制限と、飲食禁止、スペースの確保などのルールにのっとり家族と会えるようにした。同じ建物内にある小規模多機能型居宅介護施設との行き来はストップしているが、訪問美容だけは継続して喜ばれている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合う方が話せるような配置を心掛けている。必要に応じて席の配置を検討、変更し、新たな関係性の構築を伺っている。レクリエーションでも全員で参加できる風船バレー等を取り入れている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居や入院となった場合でも、いつでも気軽に相談できる関係づくりに努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりの思いや意向は、日々の生活の会話の中から引き出し、把握に努めている。重度化され、ご本人からの把握が困難な場合は、ご家族の方の意見等も取り入れ、その人らしく暮らしていただけるよう支援を行っている。	日常の会話の中や家族からの情報で、一人ひとりの思いや意向を把握して、朝礼や夕礼、グループ会議の中で情報を共有するようにしている。コロナの影響で外出の機会が少なくなっているため、事前に一人ひとりの希望を確認して、それぞれ好みの寿司をテイクアウトして喜ばれたり、天気がいい日に紅葉を見たいという希望に応じて、併設施設のスタッフの協力を得て、全員で車に乗って那須山の紅葉見学に出かけたりした。	

第2まつばら荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時にご家族、ご本人から情報、生活歴の記入・アセスメント・日常会話を元に把握を行っている。入居後も日常会話の中でご本人からどのような生活をしてきたのか等を聞く機会を設け、情報が増えるよう努力している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日常の様子・会話から現状の把握を行い、変化があればその都度、記録に残し職員間で共有を行っている。本人のできる力を発見できるように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画は協力医、家族と本人の意向・希望を基に、日々の記録や状況報告を参考に作成している。定期的に職員間での話し合いの場も設け、身体状況に変化が生じた場合はその都度、現状に応じた介護計画を作成している。	利用者の現状を確認し、家族や本人の希望を含めて、できることできないことを精査し、必要な支援を計画に盛り込んでいる。担当会議を経て、計画の同意が得られたら、職員間で随時共有している。モニタリングは計画作成担当者が月に一回行っている。身体状況が変わって自立歩行が難しくなった利用者については、車椅子で安全に移動できるように計画を見直したり、利用者の生活環境が変わっても安心して暮らせるように、必要に応じて計画を変更したりしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の申し送りにて微妙な変化や気づきを情報共有している。また、それを基に介護計画の見直しをしたり、生活課題と対応を変化したりしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご利用者の状況の変化に合わせて、臨機応変に対応している。また、ご家族と相談しながらその都度対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	必要性に応じて、医療、家族、近隣の方・ボランティア・民生委員等と協力を行い、ご本人を支える支援を行っているが、今年度も新型コロナウイルス感染予防の為交流等は行えていない。		

第2まつばら荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時に希望する医療機関を確認している。その医療機関において、定期受診を行っている。 ご家族が受診対応して下さる際には事業所での様子をご家族にお伝えしている。	かかりつけ医の受診は家族が付き添い、受診の際はバイタル表を渡し口頭で近況状況を伝え、受診後は家族から結果を聞き取り、申し送りノートと口頭で情報を共有している。現在はほとんどの利用者が月2回の訪問診療に切り替えている。事業所として訪問看護ステーションと連携していて、すべての利用者を対象として週1回定期訪問があり、24時間連絡がとれる体制になっているので、職員は安心してケアにあたることができる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	訪問看護との連携は週に1回定期訪問を依頼している他、24時間の連絡体制を整えている。常に看護師と相談助言・情報の共有を行っており、適切な看護を受けられる体制をとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中の様子については定期的に医療機関と連絡をとりあいながら経過の情報を得ている。 退院の際には看護サマリーやリハビリ経過報告書をいただき、入院中の経過を確認している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居される際の契約時に、終末期のあり方、重度化した場合の対応について、事業所ができること・できないことを説明しており、本人・ご家族の希望を確認している。状態に応じ、適宜、その確認を行っている。終末期には状況について医師からご家族へも説明していただいている。	「看取りの指針」があり、看取りの経験もあり、体制が整っていることから、今後も看取り支援を継続したいと考えている。入居時に、重度化した場合や終末期に事業所で出来ること出来ないことを家族に丁寧に説明している。また、看取りは訪問診療医が対応可能と判断した時のみとなることも説明しており、ほとんどの利用者が訪問診療に切り替えている。看取り介護が終了した後カンファレンスを行い、職員全員で支援内容を振り返っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時や事故に備えてマニュアル作成を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災は年2回、昼・夜間想定をした総合避難訓練を実施している。毎月、自主避難訓練も実施している。以前は地域の防災会会長にも協力をいただき、実施していたが新型コロナウイルス感染症予防の為、自粛している。	訓練は火災想定が多い。併設する小規模多機能型居宅介護事業所と合同で年2回の総合避難訓練と毎月課題を設定しての自主訓練を行なっている。訓練だけでなく、管理者は抜き打ちで質問を投げかけ、咄嗟の場合に備えて職員に自分の動きを考えさせる機会を作っている。開設間もなくコロナ禍になってしまい、地域や同敷地内のまつばら荘との連携強化について話を進めることは出来ていない。災害時に必要な水や食料品、用具等は備蓄している。	コロナが終息しないうちは地域との話し合いは難しいと思われるが、運営推進会議を利用して、地域との協力体制を再び築き、まつばら荘との連携のあり方についても少しずつ話し合いを進めて欲しい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	常に言葉遣いに注意しながら接している。利用者様の性格や考え方に合わせ、言葉の掛け方、対応をしている。	事業所の運営方針を実践するための手引き書が職員に配られている。利用者の人格を尊重し信頼関係を築く接遇についての心構えが書いてあり、研修時だけでなく日常的に読んでケアを振り返ることができる。優しいだけでなくサービスをする立場であることを自覚し、笑顔を忘れず声のトーンに気をつけ、利用者の立場に立った接し方を心がけ、話しやすい信頼できる存在になるよう努めている。利用者それぞれに合わせた対応や情報は職員間で共有している。個人ファイルは中身の見えない扉つきの書類棚に保存している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の関わりの中で利用者様からの希望や意見について、意向を確認し、支援にあたっている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	できる限り、本人のペースを大切に支援を行っており、業務中心にならないよう入居者一人ひとりを常に意識するよう心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	事業所へ出張理美容を依頼している。ご利用者様から希望があった際には依頼し、ご本人の希望を取り入れてカットやカラーなどしていただいている。		

第2まつばら荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の準備、片付けについてはできるところの協力をお願いしている。食事のメニューは栄養バランスを考慮して外注しているが、時々、利用者様のリクエストを取り入れたりと楽しみを持ってもらえるよう工夫している。	平常の食事はご飯と汁物は職員が作り、その他のメニューは業者から届いた物を温め盛りつけて提供している。利用者はテーブルふき、下膳、食器洗い等に参加している。季節毎の行事食(ひな祭り、母の日、土用の丑の日、敬老の日、芋煮等)を大切にしてい、職員の手作りお祝い膳や、季節ならではの食べ物、利用者も調理に参加できるメニューを提供し、ランチョンマットを手作りして季節感を出す等工夫している。コロナ禍の中、外出に出かけられない利用者に個々に食べたい物をリクエストしてもらって、日ごろは食べられないお寿司等もテイクアウトで楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事形態や食事量についてはご本人の状況に合ったものを提供している。水分摂取量にも配慮し、摂取できているかの確認をしっかりと行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアの促し・実施をしている。ご自身でできる方については見守りし、介助が必要な方については必要な介助を行っている。状況に合わせて口腔ケアの方法も検討し対応している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を活用し、排泄状況の確認を行い、定期的なトイレへの声掛けや誘導を行っている。	現在はオムツを使用している利用者はいないが、ほとんどの利用者に時間や状況に応じて声かけをしている。夜間は支援の欲しい時にはベッド横のコールを鳴らしてもらったり、利用者がベッドから降りると足元のセンサーが作動して職員が対応できるようにになっている。今ある能力を維持できるよう支援に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便記録を残し、排便状況の確認を行っている。排便が確認できない際には食事摂取量や体調面での確認を行い、医師や訪問看護の看護師に連絡し、相談をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことのできる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	利用者様の体調や気分などを確認しながら無理の無いよう入浴していただけるようにしている。午前、午後の希望に添えるよう配慮し、利用者様の能力に合わせた支援を行うことで、安全に入浴して頂けるよう支援している。	入浴1時間前から脱衣所と浴室の暖房器をセットして温かい中で入浴できるようにしている。支援は1対1で、利用者の出来ること出来ないことを見極めて、必要以上に手を貸しすぎないようにしている。入浴中は職員と2人きりになれ、安心と解放感から若い頃の話や恋愛の話等を聞くこともある。入浴に抵抗感を感じる利用者には無理強いせず、入浴だけに拘らず精神的なケアを行えるよう配慮している。	

第2まつばら荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は、無理のない程度の活動をしていただきながら、休息を交互に取り入れ、本人にとって自然なリズムで過ごしていただけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤情報を個人ケースに添付して内服薬の情報を確認できるようにしている。生活の様子を担当医へ伝え、内服薬が変更になった場合にも細かな状況を報告し、調整をしていただいている。内服薬に変更があった際には職員間で必ず情報共有を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者様の状況に合わせ、負担とならないように役割を見つけている。見つけた役割を習慣化し、利用者様の張り合いや喜びに繋げている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍の現状の中、外出の機会は設けられていないが、コロナ前は地域の方々と一緒にドライブに出かけていた。事業所の敷地内が広く、散歩するには十分の広さがある為、天気の良い日には散歩へ出かけている。	コロナ禍以前は定期的に外出し記念撮影をしていた。ボランティアも参加し車椅子を押したりおやつ準備してもらったりしていた。コロナ禍では定期的な外出はできないが、下車しなくても花や紅葉が見られる場所を職員が事前に探しておいて、ドライブに出掛けて喜ばれている。気候の良い日には事業所の広い敷地内を散歩して気分転換をしている。散歩が強制にならないよう、声かけをして利用者の意向を確認している。寒くなってからは室内から窓の外景色を眺めて季節を味わってもらっている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金については管理が難しいため、基本的に、ご家族に協力を頂いている。ご自身で買い物をされたいという場合には事業所で立て替え、必要なものが購入できるよう配慮している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者様から要望があった場合には、ご家族への電話連絡も対応させて頂いている。利用者様宛に届いた手紙についてはご本人へお渡しさせていただき、いつでも読めるようにしている。		

第2まつばら荘

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	照明の明るさや換気に十分配慮している。季節に合った装飾を行い、室内にいても季節を感じて頂いたり、利用者様で作った作品をリビングに展示し、皆で共有できるよう工夫している。	建物内は落ち着いた茶色で統一されている。リビングは広く窓も大きく明るい。用途に応じて組み合わせで色々な形にできる台形のテーブルがあり、全員で食事をしたりテレビを見る時は大きな半円に、少人数での活動の時は小さな半円にしている。コロナ禍で外出が減ってしまったので、フロア内は季節を感じられるレイアウトを心がけて四季折々のものを飾っている。空気清浄機が設置されていて、2時間毎に窓の上部を開けて換気している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者様の状況により、テーブルや席の配置、照明の明るさ等、臨機応変に対応している。気の合う利用者様同士で楽しい時間が持てる、ゆっくりとした時間を過ごしたい等、それぞれの方が過ごしやすくなるよう配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	全居室にトイレ、洗面台が設置しており、自室で 過ごす際にはご自身のペースで使用できるようになっています。入居の際にはご自宅で使われていた馴染みの物を自由に持ち込んでいただいている。	居室にはトイレ、洗面台、ベッド、カーテン、床頭台、エアコン、空気清浄機、タンスが備えられている。時々利用者也参加して、職員が朝夕2回掃除をして清潔な居室である。入居の時に家族は新しい物を揃えて持たせがちだが、事業所では、新しい物は利用者が自分の物だと認識しにくく混乱してしまうことがあり、今まで使っていた馴染みの物を持参してもらいたい。明るく清潔な室内はテレビが置かれたり、家族の写真やぬりえの作品等も飾られ利用者それぞれの居心地の良い居室になっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内の整理整頓を徹底し、生活する中で、ご自身で自由に動ける環境作りを行っている。各居室入り口に目印や表札をつける等、工夫をしている。		